

ホソハンミョウ *Cylindera (Cylindera) gracilis* (Pallas, 1777)

ハンミョウ科 Cicindelidae

静岡県カテゴリー 部会注目種(N-I 現状不明) : 変更コード 14

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)]

1. 種の解説

体長 10~12 mm。背面は暗青灰色で光沢を欠き、翅鞘両側の中央と翅端前に黄白色で縦長の斑紋を装う。翅鞘会合部後半に赤褐色の縦位の長楕円形斑を有する個体があるという。体はおおむね細いヒョウタン形、後翅は退化し、飛ぶことはできないとされる。

成虫は6~10月頃に出現し、草間や藪の中などの地表を敏速に走り回って小昆虫を捕食する。行動時の姿はアリやある種のハチに似ているという。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国北東部、モンゴル、シベリア、ロシア、ウクライナなどに、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では東部の愛鷹山における非常に古い記録と、戦前に西部の三方ヶ原台地で目撃したという記述がある。

3. 生息環境

低地から丘陵地の下草の少ない疎林や河畔の草地、果樹園などの耕作地に生息する。植物被度の少ない草地を好むという。

4. 生息状況

近年の生息状況に関する情報は全くない。絶滅種との判断を下すには情報不足であるので、現在でも生息可能と考えられる場所において、本種を対象とした調査を行う必要がある。

5. 減少の主要因と脅威

河川改修工事などの影響(13)で河川敷の生息環境が減少している。開発など(23)による自然草原の減少や植生遷移の進行(54)に伴う生息に好適な草地の消滅なども一因と考えられる。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

成虫はきわめて敏速に行動し、発見すること自体が困難である。

8. 主な文献

岡野喜久磨・真野嘉永(1941) 沼津市・三島市・静岡県駿東郡・田方郡の斑猫科予報. 昆虫世界, 45(528): 237-240.

渡辺一雄(1976) ハンミョウ 身の軽い山道のミチオシエ. 池田二三高・草間慶一・杉本 武・高橋真弓・渡辺一雄, 静岡県の自然 四季の昆虫, pp. 122-123. 静岡新聞社, 静岡.

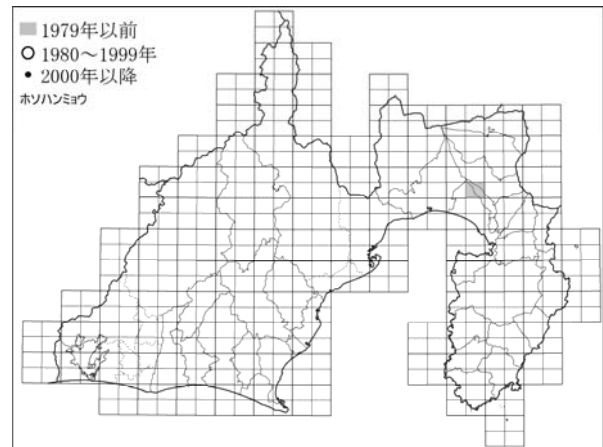
9. 標本

なし。



©2019 H.Ishikawa

愛知県産 2007年7月 撮影:石川 均



(多比良嘉晃)

リュウガシメクラチビゴミムシ *Kurasawatrechus ryugashiensis* S. Uéno, 1988

オサムシ科 Carabidae

静岡県カテゴリー 現状不明(N-I)変更コード9

[2004年版カテゴリー 部会注目種(N-III) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長 2.8 mm。暗赤褐色で体表に著しい長毛を散生する。体はおおむね細いヒョウタン形で、複眼及び後翅は退化する。

同属の他種とは、地理的にも分類学的にもかなり孤立しており、特異な種であるという。

2. 分布

1987年に浜松市北区引佐町田畑の竜ヶ岩洞付近の「竜ヶ岩の堅穴」(＝戸田の堅穴)で発見され、1988年に新種として記載されたもので、浜松市引佐町三岳「たちすのしゃどう」の標本とともに静岡県の固有種である。

3. 生息環境

石灰岩の洞窟内に生息する。

4. 生息状況

原記載以降、採集記録は知られておらず、詳細な生息状況は不明である。

5. 減少の主要因と脅威

竜ヶ岩洞は1983年に観光洞としてオープンし、以来950万人以上が入洞したとされ、入洞者による洞内外の環境汚染(18)や、周辺山林の開発(23)などによる洞窟を含む山全体の乾燥化などが懸念される。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

本来、洞窟内だけではなく地下浅層に生息する一群であるので、竜ヶ岩洞周辺の洞窟群あるいは地下浅層に生息している可能性が高く、周辺地域の綿密な調査をする必要がある。

8. 主な文献

市橋 甫・天春明吉・稲垣雄二(1983)地底の生物 豊橋を中心とする石灰洞の動物(節足動物). 地底の音, p. 55-64. 三遠洞くつ研究会, 豊橋.

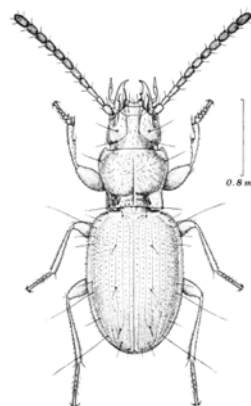
石川 均(1999)草間先生との洞窟探検. 静岡の甲虫, 11(1/2): 4-9

Uéno, S. (1988) Occurrence of a new *Kurasawatrechus* (Coleoptera, Trechinae) near the Pacific coast of Central Japan. *Bulletin of the national museum of nature and science, Tokyo, (A)*, (14): 97-103

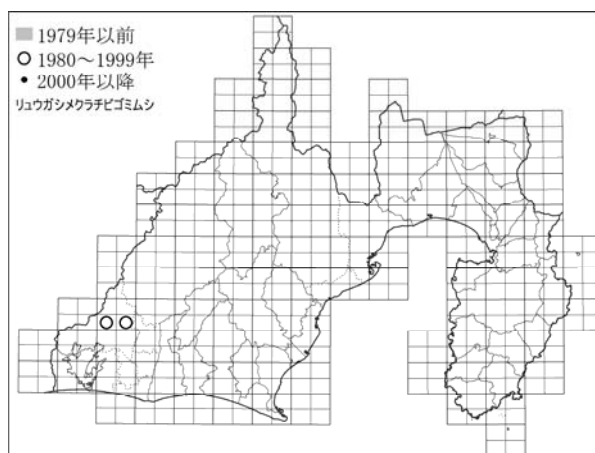
9. 標本

浜松市産: 国立科学博物館所蔵(ホロタイプ)

(多比良嘉晃)



Uéno(1988)より



マルガタゲンゴロウ *Graphoderus adamsii* (Clark, 1864)

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 現状不明(N-I)変更なし

[2004年版カテゴリー 現状不明(N-I) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類(VU)]

1. 種の解説

体長 12~14 mm。黄褐色で光沢を有し、後頭部、前胸背板前・後縁の横帯紋、翅鞘のほぼ全面を覆う密な小点斑などは黒色、体下面は暗赤褐色、肢は暗黄褐色で後肢脛・跗節は暗色。体は短卵形で背面はよく膨隆し、翅鞘には3条のまばらな点刻列を有する。

成虫は4~10月に活動し、肉食性、夜間灯火に飛来することがある。幼虫は主にミジンコ類を食べるといふ。

2. 分布

国外では朝鮮半島、中国に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では掛川市高御所と浜松市南区米津町で記録がある。

3. 生息環境

平地から丘陵地の水生植物の豊富な池沼、休耕田、放棄水田などに生息する。

4. 生息状況

県内での記録がきわめて少なく、生息状況は不明である。浜松市南区米津町では1970~80年代には安定して生息していたようであるが、その後、海岸後背湿地が改変・整備されて、現在は確認できない。

5. 減少の主要因と脅威

池沼の埋め立てや護岸工事(12)、農薬・肥料などの流入による水質汚染(32)、植生遷移の進行(54)や富栄養化に伴う水質悪化(31)などによって生息環境が失われた。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

近年に西部で目撃したという話があるが、標本は存在していないという。

8. 主な文献

細田昭博(2011)ゲンゴロウ類の記録. 遠州の自然, (34): 1-4

北野 忠(2010)減少する水田の水生昆虫たち. 静岡新聞社・創碧社 編, 静岡県田んぼの生き物図鑑, pp. 26-27. 静岡県農林技術研究所, 磐田.

森 正人・北山 昭(2002)改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京, 231 pp.

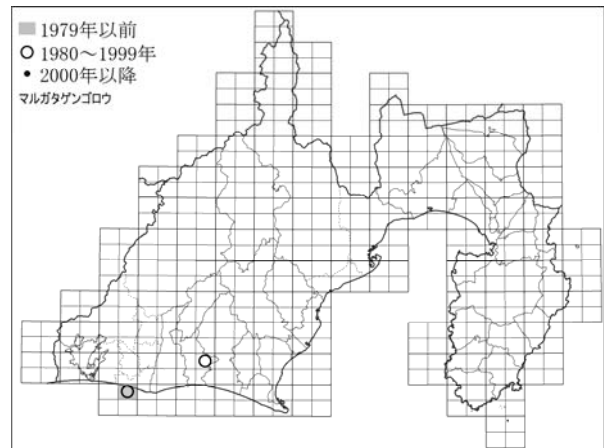
静岡県(1994)中遠・東遠広域都市計画 小笠山総合運動公園環境影響評価書. 473 pp.

9. 標本

浜松市産: 磐田市桶ヶ谷沼ビジターセンター所蔵



浜松市産 1979年9月30日 撮影: 北野 忠



(多比良嘉晃)

コガタガムシ *Hydrophilus bilineatus cashimirensis* Redtenbacher, 1892

ガムシ科 Hydrophilidae

静岡県カテゴリー 現状不明(N-I)変更なし

[2004年版カテゴリー 現状不明(N-I) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類(VU)]

1. 種の解説

体長 23~28 mm。長楕円形で背面は凸隆し、腹面はおおむね平坦、少し緑褐色を帯びた黒色で、触角柄部及び口枝などは黄褐色、肢の腿節を含む体下面は多少とも赤褐色、背面は滑沢だが腹部を含む体下面には濃黄褐色の微毛をピロード状に密生する。後胸腹板突起は針状に鋭く突出し、第6腹節腹板(外見上の腹部第4節)前縁に達する。

幼虫はガムシ *Hydrophilus* (*Hydrophilus*) *acuminatus* Motschulsky, 1853 と同様に肉食性で、巻貝を食べる。成虫は夜間、灯火に飛来することがある。

2. 分布

国外では中国、台湾、東南アジア、カシミール、インド、スリランカに、国内では本州、四国、九州、南西諸島に分布する。県内では磐田市福田の採集例があるが、詳細なデータは未発表である。

3. 生息環境

平地の水生植物の豊富な池沼、湿地、水田、休耕田などに生息する。

4. 生息状況

県内の採集例は1例のみであるので、詳細な生息状況は不明である。近隣の山梨県、愛知県、三重県では最近の採集例もあるので、県内において再発見される可能性がある。

5. 減少の主要因と脅威

全国的には、開発(23)や圃場整備(15-2)などによる池沼・水田などの埋め立てによって生息環境が減少していることなどが原因と考えられている。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

磐田市福田の採集例はライトトラップに飛来した個体である。

8. 主な文献

野村周平・溝上誠司・大塚健之(1996) 佐賀県の水生甲虫. 佐賀県の生物編集委員会 編, 日本生物教育会第51回全国大会 佐賀大会記念誌 佐賀県の生物, pp. 249-262. 佐賀県生物部会, 佐賀.

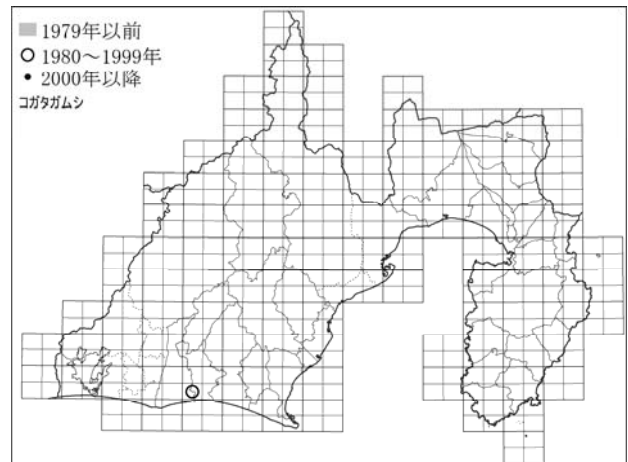
9. 標本

磐田市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 Y.Tahira ©2019 H.Ishikawa

磐田市産 1983年8月9-10日 多比良嘉晃・石川均



(多比良嘉晃)

静岡県カテゴリー 現状不明(N-I)変更なし

[2004年版カテゴリー 現状不明(N-I) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

体長 14～25 mm。黒色で触角球桿部先端 3 節は橙黄色、翅鞘の肩部後方と翅端前に橙赤色の太い帯状紋を有する。各帯状紋は遊離した小黒点を含まず、前・後縁は強く波曲し、会合縁に達することはない。肢は強壯で、オス前肢附節は横に広がり、後肢脛節は湾曲する。

主にネズミなどの小型脊椎動物の死体に来集して、成虫・幼虫ともに腐肉を食べる。成虫は夜間、灯火に飛来することがある。モンシデムシ属は死体上でつがいとなり、雌雄は死体を土中に埋葬し、幼虫に口移しで給餌する習性がある。

2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国、モンゴル、極東ロシアに、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では静岡市葵区井川峠、磐田市桶ヶ谷沼、浜松市天竜区二俣町の記録があり、他に磐田市福田の採集例がある（未発表）。

3. 生息環境

主に平野部の河川敷や草原に生息する。

4. 生息状況

県内での記録は少なく、詳細な生息状況は不明である。近年全国各地で個体数が減少しているとされる。

5. 減少の主要因と脅威

開発 (23) や河川改修工事 (13) などによって生息環境が破壊・改変され、生息範囲が狭められている。また、餌となる小動物が減少 (71) したことが要因とする研究者がいる。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

本種を対象とした調査は十分行われていない。

8. 主な文献

服部寿夫 (1969) 1968 年安倍川上流における甲虫類の採集記録. 駿河の昆虫, (66): 1911-1918

杉山恵一 編 (1990) 桶ヶ谷沼の自然環境—桶ヶ谷沼自然生態調査および立地条件調査—. (財) 日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

鈴木誠治 (2003) モンシデムシ最近の話題 (1) 育児行動. 昆虫と自然, 38(10): 32-35

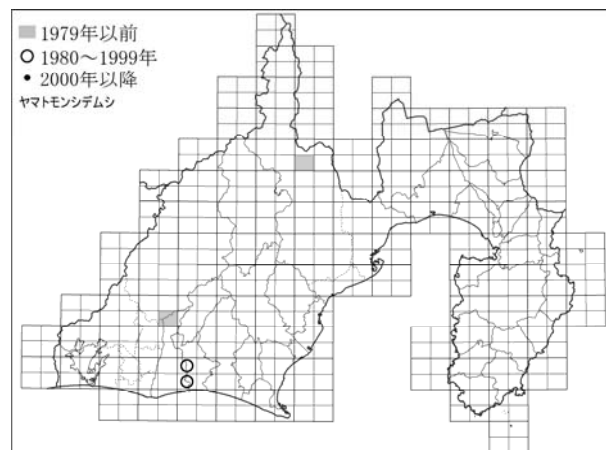
坪井俊久 (1977) 天竜市二俣町の甲虫類 (I). 駿河の昆虫, (97): 2852-2859

9. 標本

磐田市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 Y.Tahira ©2019 H.Ishikawa
磐田市産 1983年8月9-10日 多比良嘉晃・石川均



(多比良嘉晃)

オオフタホシマグソコガネ *Aphodius (Aphodius) elegans* Allibert, 1847

コガネムシ科 Scarabaeidae

静岡県カテゴリー 現状不明(N-I)変更なし

[2004年版カテゴリー 現状不明(N-I) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長 11.0~13.0 mm。黒色で中央後方の二大横紋をのぞく翅鞘は黄色。体はおおむね長円形で、背面に強く凸隆し、頭部は大きく、オスは中央前方に1本の小さい角状突起と後方両側に1対の低い隆起を具え、メスではそれぞれわずかに隆まるのみ。前胸背板は粗大点刻を散布し、オスでは中央前方が圧せられる。

成虫は春季と秋季に出現して日向の牛糞に集まる。成虫は夜間、灯火に飛来することがある。

2. 分布

国外では朝鮮半島、済州島、台湾、中国、インドシナ半島に、国内では北海道、本州、佐渡島、伊豆諸島、奄岐、四国、九州、対馬、五島列島、トカラ宝島、奄美大島、徳之島、沖縄本島に分布する。県内では富士宮市朝霧高原と浜松市浜北区で記録がある。

3. 生息環境

平地から山地の放牧地などに生息する。

4. 生息状況

県内の記録が少ないので、詳細な生息状況は不明である。

5. 減少の主要因と脅威

農村における牛馬の飼育の衰退や放牧場の減少(71)に伴い、生息地が限られてきている。また、寄生虫駆除薬(イベルメクチン)を投与された牛の新しい牛糞では本種幼虫の生存率が著しく低下するという報告があり、減少の要因の可能性の一つと考えられる(71)。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

ウェブ上には、2011年に朝霧高原で採集した内容の記事が掲載されている。

8. 主な文献

堀口 徹(2005) オオフタホシマグソコガネについて. 昆虫と自然, 40(2): 21-24

塚本圭一(1991) 日本産食糞性(広義)コガネムシ類の日本列島における分布記載 放牧家畜などの糞処理昆虫についての基礎的研究 16. SAIKAKU, (10): 34-65

渡辺一雄(1986) オオフタホシマグソコガネの乱舞. 遠州の自然, (9): 61

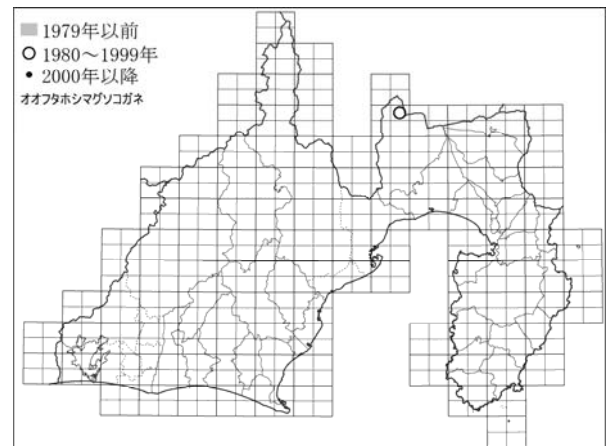
9. 標本

富士宮市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 Y.Tahira

富士宮市産 1981年10月25日 多比良嘉晃採集



(多比良嘉晃)

ムモンアカシジミ *Shirozua jonasi* (Janson, 1877)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-I 現状不明) 変更コード 1, 5

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張はおよそ 40 mm。翅の表裏とも赤褐色で、表はメスの前翅先端に黒斑がある。裏面には褐色の縦縞がある。幼虫は半肉食性で、若齢の時は主にブナ科の植物の葉のほか、アブラムシやカイガラムシの分泌物を食べ、中齢以降はアブラムシやカイガラムシを捕食する。卵で越冬。成虫は年 1 回、7 月中旬から発生し 9 月中旬まで見られる。日中の行動は不活発で、主に夕方活動し、ヒメジョオンなどの花で吸蜜する。

2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシア南東部、中国東部に分布し、国内では北海道、本州中部以北に分布する。県内では 1958 年 8 月 18 日、静岡市葵区井川富士見峠で 1 ♀ が採集され、その 54 年後の 2012 年 8 月 19 日、富士宮市根原で 1 ♀ が採集された。

3. 生息環境

落葉広葉樹林に生息しているとみられるが、県内での実態は不明である。

4. 生息状況

1958 年と 2012 年に 1 個体ずつ採集されたにすぎず、個体数はきわめて少ないが、本種の生態からみて土着していると考えられ、今後の調査によりさらに発見される可能性が高い。

5. 減少の主要因と脅威

希少種であり、減少している状況かどうか不明である (99)。

6. 保護対策

落葉広葉樹林の存続が不可欠である。

7. 特記事項

本県の記録はきわめて少ないが、隣県の山梨県、長野県では稀ではない。愛知県では 1998 年に初めて記録された。

8. 主な文献

高橋真弓 (1958) 井川林道 8 月中旬の蝶類. 駿河の昆虫, (23): 609

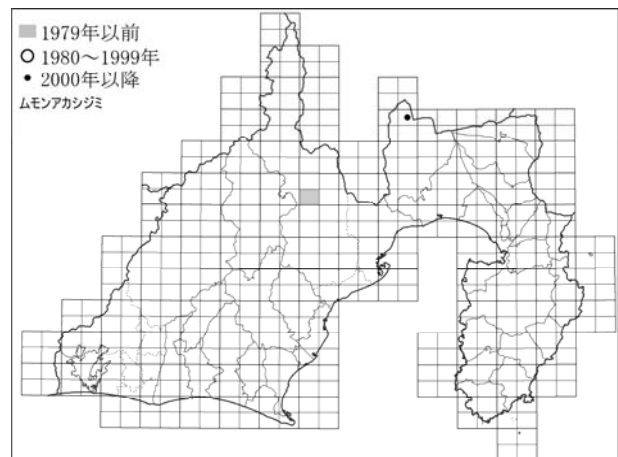
谷川久男 (2012) 富士宮市根原でムモンアカシジミを採集. 駿河の昆虫, (239): 6594

9. 標本

静岡市産 (1 個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 H.Tanikawa
富士宮市産♀表面 2012年8月19日 谷川久男採集



(諏訪哲夫)

ジョウザンミドリシジミ *Favonius taxila taxila* (Bremer, 1861)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-I 現状不明)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-I 現状不明) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張およそ 35~37 mm。オスの表面は金属光沢のある青緑色、メスの表面は黒褐色。後翅の裏面に W 字型の白い線状の紋がある。幼虫の食餌植物はミズナラ。卵で越冬。年 1 回発生、7 月中旬頃から出現しメスは 9 月まで見られる。

2. 分布

国外では日本海を囲むロシア南東部、サハリン、朝鮮半島、中国に、国内では北海道、本州では東北から中国山地まで分布する。県内では大井川源流地域と富士山西麓からわずかな記録があるのみである。

3. 生息環境

県内で記録された個体数はきわめて少ないので生息環境を特定することはできないが、県外での生息状況から推測すると食餌植物のミズナラを主体とする落葉広葉樹林が生息地となっていると考えられる。

4. 生息状況

大井川源流地域で 1953~1966 年に 5 件、1974 年富士宮市広見上井出林道で 1 件の記録があるのみであった。富士山の記録地点は落葉広葉樹が伐採されてヒノキが植栽され、現在も生息しているとは考えられない。大井川源流地域ではその後、度重なる調査にもかかわらず発見されていなかった。しかし、2017 年の調査で 51 年ぶりに静岡市井川の県民の森で 1♂が採集された。

5. 減少の主要因と脅威

きわめて少数の記録しかないため、減少しているかの状況は不明 (99) である。生息にはミズナラを主体とする落葉広葉樹林の存続が不可欠である。

6. 保護対策

ミズナラを主体とした落葉広葉樹林の存続が欠かせない。

7. 特記事項

隣県の山梨県や長野県ではかなり個体数の多い種にもかかわらず本県では最も稀な種の一つとなっている。大井川の源流部にはまだ広大な落葉広葉樹林が残されていることから生息している可能性は十分高く今後のきめ細かい調査が必要である。

8. 主な文献

遠藤光昭 (1958) 南ア東岳・赤石岳付近蝶類分布調査報告. 駿河の昆虫, (24): 620-624

池谷 正 (2017) 静岡市井川でジョウザンミドリシジミを採集. 駿河の昆虫, (260): 7126

稲葉 茂 (1981) 富士宮市人穴付近の蝶の記録. 駿河の昆虫, (115): 3392

高橋真弓 (1953) 大井川水源地方蝶類分布調査報告. 駿河の昆虫, (4): 64-81

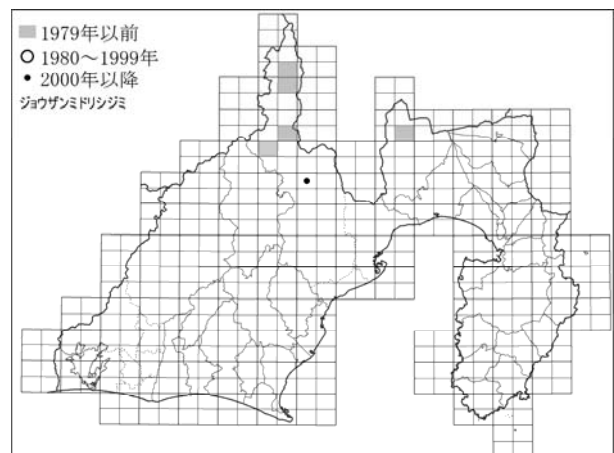
高橋真弓 (1966) 大井川水源地方蝶類分布調査報告 (第 14 報). 駿河の昆虫, (56): 1540-1557

9. 標本

各産地 (少数個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 S.Inaba
富士宮市産♂裏面 1972年6月19日 稲葉 茂採集



(諏訪哲夫)

オオヒカゲ *Ninguta schrenckii schrenckii* (Ménétriès, 1858)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-I 現状不明) 変更コード 5

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張 70~80mm。ジャノメチョウ類では最も大型。県内で採集された唯一の個体は 65 mm と小さい。翅の表裏とも灰色を帯びた薄い褐色。後翅表の外縁には黒い斑点が、裏には目玉模様が並ぶ。幼虫の食餌植物はカヤツリグサ科。幼虫で越冬。成虫は年 1 回発生し、7 月下旬~8 月に見られる。

2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシア南東部、中国東北部・西部などに分布し、国内では北海道、本州に分布する。北海道、東北地方では平地から低山地にかけて広く分布し、関東及び本州中部より南では山地性となる。近畿地方から中国地方にも産地は点在する。県内では浜松市天竜区水窪町大嵐で 1 ♀ が採集されただけである。

3. 生息環境

県内では 1 個体のみ記録しかない。隣接する県の状況によると、樹林内やその周辺の湿地など、大型スゲ類が群落をつくるような薄暗い草地に生息する。西三河の山間部では、休耕田を足がかりにして分布を広げているが、本県までは達していない。

4. 生息状況

1973 年 9 月 13 日、浜松市天竜区(旧水窪町大嵐)で採集された 1 ♀ が県内唯一の記録であり、その後の追加記録はない。採集者自身、報告文の中で定着の可能性が低いことを指摘している。

5. 減少の主要因と脅威

偶産の可能性が高く、減少とか脅威は想定しにくい。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

近隣では、伊那谷や西三河の山間部に産地が点在するが、地形的にみて自力で飛んできたとは考えにくく、JR 飯田線で運ばれた可能性がある。西三河では、湿地化した休耕田を利用して分布を広げている。

8. 主な文献

福井順治 (1977) 佐久間・水窪の蝶類(III)。駿河の昆虫, (96): 2824-2829

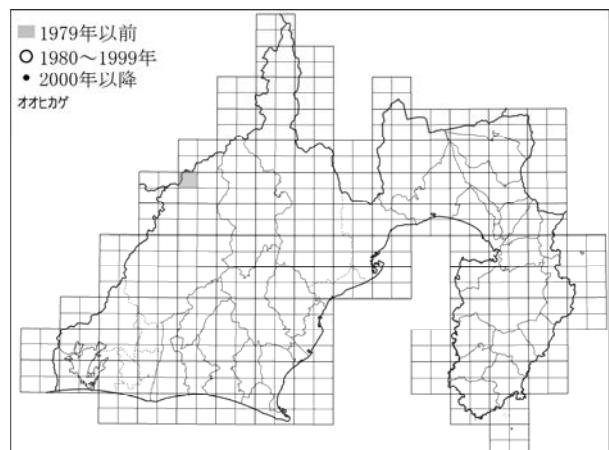
9. 標本

浜松市産 (1 個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



©2019 M.Fukui
水窪町産♀裏面 1973年9月16日 福井順治採集



フジアキタクロナガオサムシ

Carabus (Euleptocarabus) porrecticollis pacificus (Imura & Matsunaga, 2011)

オサムシ科 Carabidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧II類(VU)]

1. 種の解説

体長24~33 mm。背面は黒色で、頭部、前胸背板、鞘翅基部及び側縁部は青紫色の光沢を帯びる場合が多いが、本亜種は他亜種に比しより暗色で、特に鞘翅は側縁部をのぞき青紫色光沢を欠くものが多い。前胸背板側縁は前方がより直線的で後方の波曲は弱い。前胸側板側片の顆粒は基亜種に比しやや疎で、鞘翅肩部に鋸歯状の切れ込みをもたない個体が大半である。

春繁殖・成虫越冬型のオサムシであるという。

2. 分布

日本固有亜種で、東部の富士山南～西麓、富士市と富士宮市の一部（標高230~600 m）に分布する静岡県固有亜種である。種アキタクロナガオサムシ *C. (E.) porrecticollis* Bates, 1883 は、主として本州の日本海側、関東平野北縁、濃尾平野北東縁、紀伊半島北部などに分布している日本固有種である。

3. 生息環境

ナラ、クリなどからなる落葉広葉樹林やスギ・ヒノキ人工林の林床に生息し、むしろ人工林内に多いようである。

4. 生息状況

生息地での個体数は少なくないが、分布域が狭く局限されている。

5. 減少の主要因と脅威

もともと分布が局限している(61)うえ、森林伐採(11)、宅地開発(23)、道路建設(24)などが減少に拍車をかけている。また、市街地に近く訪れるのが容易なため、愛好者による採集圧(41)も心配され、実際に相当数の採集者が現地に入っている。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

ルイスオサムシ、シズオカオサムシ、マイマイカブリの3種と混生しているが、クロナガオサムシ、オオクロナガオサムシの2種は本種の分布域の周辺部に側所的に見られ、基本的には住み分けている。

8. 主な文献

Imura, Y. & M. Matsunaga (2011) Discovery of an isolated population of *Limnocarabus (Euleptocarabus) porrecticollis* (Coleoptera, Carabidae) from the southern foot of Mt. Fuji in Shizuoka Prefecture, central Japan. *Elytra*, N. S., 1: 1-14

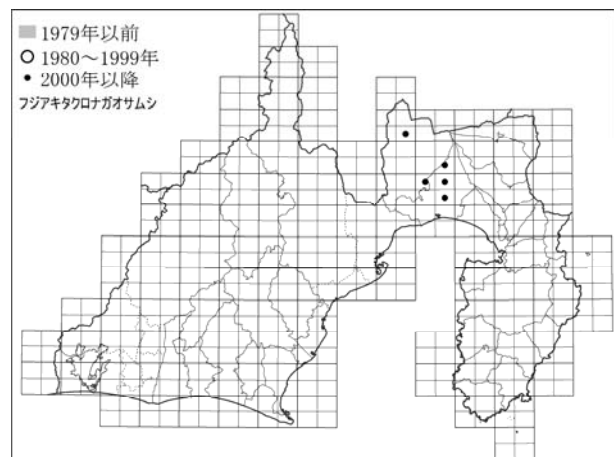
9. 標本

富士市大淵産：北海道大学総合博物館所蔵（ホロタイプ）



©2019 A.Koyama

富士宮市上井出産 2017年12月 古山 暁採集



(多比良嘉晃・石川 均)

ギンイチモンジセセリ *Leptalina unicolor* (Bremer & Grey, 1852)

セセリチョウ科 Hesperiidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

開張はおよそ 30 mm。翅表は暗褐色、裏側は黄褐色をしている。後翅裏面には春型は銀色の、夏型は黄褐色の直線の帯があり、銀一文字の名前の由来となっている。幼虫の食餌植物はススキ。幼虫で越冬。成虫は低地では年 3 回発生するが、標高が高くなると 1 回あるいは 2 回となる。

2. 分布

国外では中国中部から東北部、朝鮮半島などに、国内では北海道から九州まで広く分布する。県内では富士山麓の草原のほか、静岡市北部の山地、天竜川、太田川、菊川、狩野川などの河川沿いの低地に点在して分布する。

3. 生息環境

富士山麓の明るいススキ草原のほか、中・西部では非火山の山地草原や平地を流れる大きな川の河川敷、堤防、あるいは人為的に草地として維持されている場所などが生息地となっている。

4. 生息状況

静岡市の大井川上流部などの山地の草原の生息地は 1980 年代の終わりには消滅したとみられる。富士山麓では生息地、個体数ともに減少傾向とみられるが、北伊豆の狩野川流域では比較的安定して生息している。西部では最近の調査が十分ではなく記録がほとんどない。

5. 減少の主要因と脅威

大きな河川の堤防では大型機械による草刈り、また空き地や農耕地の周囲、小河川の堤防なども草刈りの方法や規模など、管理の方法が影響 (13) している可能性があると考えられる。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

北條篤史 (2002) 静岡県西部におけるギンイチモンジセセリの分布調査. 駿河の昆虫, (197): 5515-5516

石川由三 (1959) 大井川水源地方 (5 月下旬) の蝶類. 駿河の昆虫, (27): 700-706

清 邦彦 (1976) 富士山周辺のギンイチモンジセセリ. 駿河の昆虫, (94): 2741-2760

清 邦彦 (1984) 静岡県及び山梨県における河川敷・堤防・海岸の蝶覚え書 (3), 駿河の昆虫, (125): 3633-3646

白井和伸 (1987) 浜松北高生物部に保管されているチョウの標本について. 駿河の昆虫, (139): 4012-4015

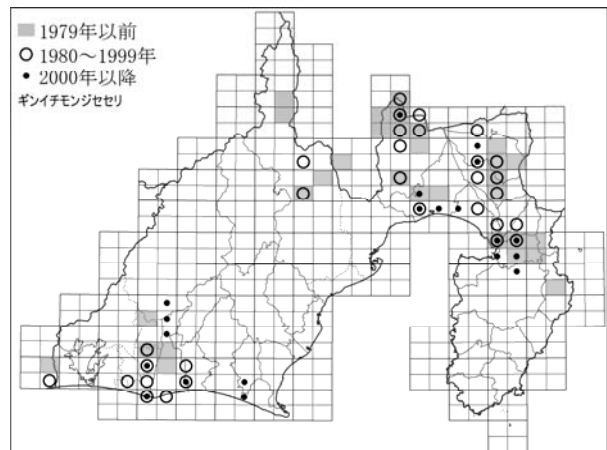
9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



御殿場市産♂裏面 2013年5月5日 諏訪哲夫採集



コキマダラセセリ *Ochlodes venatus venatus* (Bremer & Grey, 1852)

セセリチョウ科 Hesperidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張およそ 35 mm。翅の表裏とも全体が黄褐色。幼虫の食餌植物は主にススキ。幼虫で越冬。成虫は年 1 回発生し、7~8 月に見られる。産地により発生の時期が異なることがある。ノアザミなどの花をよく訪れる。

2. 分布

国外ではロシア極東地域、朝鮮半島、中国北部・東北部に、国内では北海道と本州に分布する。県内では富士山麓に広く見られるほか、中・西部や伊豆の一部からも記録がある。

3. 生息環境

標高およそ 200~1,400 m の低山地から大井川の上流部の山地まで分布する。ススキが多く、成虫の吸蜜に適する草花が見られる明るい草原に生息する。

4. 生息状況

伊豆半島では、東伊豆町では細々と生息しているが、他の地域では 1950 年代以降調査不足もあって記録がない。富士山麓では個体数は減少しているように思えるが、まだ安定して生息している。静岡市の山間部ではやや減少している。浜松市北部の竜頭山周辺は最近新しい記録が報告されている。

5. 減少の主要因と脅威

ススキを主体とした草原の代表的な種であり、植生遷移 (54) により樹木が侵入し草原が衰退していくと本種の生息にも影響される。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

木村一好 (2016) スーパー林道天竜線のコキマダラセセリ (2015 年) . 駿河の昆虫, (256): 7020

小澤資朗 (2008) 藤枝市, 川根本町でコキマダラセセリ. 駿河の昆虫, (222): 6173

清 邦彦 (2016) 富士山麓の草原における蝶類群集の変化 [第 5 報] . 駿河の昆虫, (255): 6977-6983

諏訪哲夫・鈴木英文・高橋真弓 (2012) 2011 年, 富士山地域の蝶類の記録. 駿河の昆虫, (237): 6534-6539

高橋真弓 (1978) 静岡県および山梨県のコキマダラセセリとアカセセリ. 駿河の昆虫, (100): 2929-2936

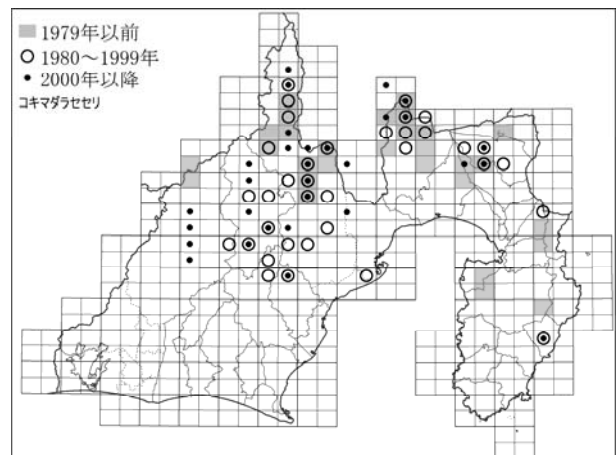
9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



静岡市産♂表面 2016年7月19日 池谷 正採集



オオチャバネセセリ *Polytremis pellucida pellucida* (Murray, 1875)

セセリチョウ科 Hesperidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更コード13

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧II類 (VU) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張およそ 35~40 mm。表面は黒褐色、裏面は黄褐色の地色にセセリチョウ特有の白斑がある。後翅の白斑の並び方で近縁種との区別ができる。幼虫の食餌植物はネザサなどのタケ・ササ類。幼虫で越冬。成虫は 5 月下旬~6 月中旬(高標高地では 7 月下旬)に第 1 化が、第 2 化は 8 月下旬から現れ 10 月中旬まで見られる。初夏はノアザミ、秋はキツネノマゴなど各種の花で吸蜜する。

2. 分布

国外ではサハリン、中国中・南部に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では伊豆半島北部から水窪町まで広く記録がある。中部、東部からは記録が多く、西部からは少なかったが、最近の調査で西部にも広く分布していることが判明している。

3. 生息環境

主な生息環境は、低山地の水田や茶畑に隣接し、周辺には食草のネザサ群落があり、ノアザミなどの花が多い草地や堤防、あるいは農道の法面などが生息地である。

4. 生息状況

1960 年代までは中部・東部地域では平野部から 1,000 m を超える山地まで広く生息し、個体数も少ないものではなかった。1970 年代に入ると県内多くの地域から記録が途絶え、絶滅が危惧されていた。2010 年代になって、県西部地域の調査の進展により菊川市、掛川市、森町などのいわゆる里山には広く生息し、個体数も多いことが判明した。

5. 減少の主要因と脅威

中部地域は里山の環境に乏しいうえに耕作地や雑木林の周辺は人手を掛けなくなり植生遷移 (54) が進んだことにより好適な生息環境が減少したことなどが要因と考えられる。

6. 保護対策

人の手による伝統的な手法で行う農地が残ること、また、農道などの舗装はできる限り控えることが保護につながると考えられる。

7. 特記事項

西部地域の低山地では水田や茶畑の周囲の草刈りが頻繁に行われるなど管理がいきとどいており、また食草となるネザサ群落が広く分布し、これらが本種の生息を支えていると考えられる。

8. 主な文献

高橋真弓 (1989) 静岡県および山梨県南部におけるセセリチョウ科 3 種 (ホソバセセリ, オオチャバネセセリ, ミヤマチャバネセセリ) の分布と採集記録. 駿河の昆虫, (148): 4229-4252

山下 健 (2000) 本川根町のオオチャバネセセリ, 1999 年も健在. 駿河の昆虫, (189): 5302

袴田和弘 (2012) 2012 年菊川市のオオチャバネセセリの記録. 駿河の昆虫, 239: 6589.

諏訪哲夫 (2014) 遠州地方におけるオオチャバネセセリの調査 (2012 年秋~2013 年). 駿河の昆虫, (245): 6738-6740

蒔苗博道 (2015) 裾野市におけるオオチャバネセセリの記録. 駿河の昆虫, (252): 6920

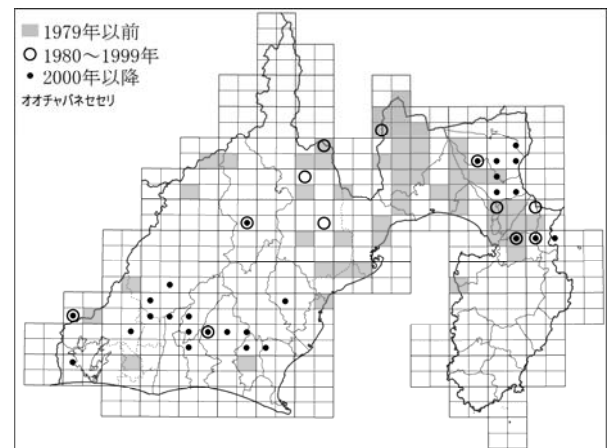
9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



袋井市産♀表面 2016 年 5 月 27 日 諏訪哲夫採集



オナガシジミ *Araragi enthea enthea* (Janson, 1877)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張およそ 35 mm。翅の表は黒褐色、裏は白地に黒い斑点があり、後翅端はオレンジ色である。幼虫の食餌植物はオニグルミ。卵で越冬。成虫は年 1 回発生し、7月下旬～8月に見られる。主に夕方活動する。

2. 分布

国外ではロシア南東部、朝鮮半島、中国東北部・西部、台湾などに、国内では北海道、本州、四国、九州に分布するが、西日本では局地的となる。県内では富士山麓の一部、静岡市北部及び浜松市天竜区水窪町の山地から記録されている。

3. 生息環境

食樹であるオニグルミのある溪流沿いが主な生息地となるが、富士山西麓の朝霧高原のようなどころでも生息している。

4. 生息状況

県内において成虫の個体数は少ないうえ、活動は主に夕方で、あまり活発ではないことから見かけることはかなり稀であり、発表された記録も少ない。冬季、卵の調査では比較的容易に発見できることから、まだそれほど危機的状況にはなっていないとみられる。

5. 減少の主要因と脅威

食樹がオニグルミに限られ、成虫の行動もこの木から離れることもない。産卵も空間に突き出た枝が好まれることから、オニグルミが周囲の樹木に被圧される(54)ようになると本種の生息が困難になる。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

天野市郎 (2004) 静岡県ミドリシジミ類の若干の採卵記録. 駿河の昆虫, (207): 5777

浅野 隆 (2008) 静岡県川根本町奥泉と寸又峡温泉でオナガシジミの卵を採集. 駿河の昆虫, (222): 6178

袴田四郎・諏訪哲夫 (1976) 安倍川上流西日影沢の蝶の幼虫 2 種. 駿河の昆虫, (95): 2810

白井和伸 (2000) 水窪町と周辺のオナガシジミの分布について. 駿河の昆虫, (192): 5385-5387

高橋真弓 (1967) 静岡県とその周辺のみドリシジミ類についての覚え書. 駿河の昆虫, (57): 1561-1608

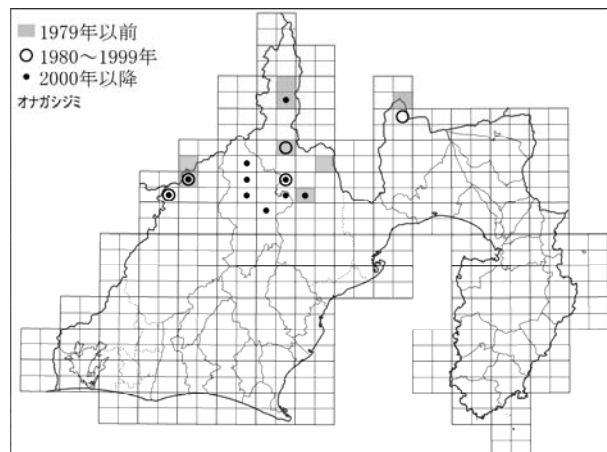
9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



静岡市産♀裏面 2012年7月24日 諏訪哲夫採集



ウスイロオナガシジミ *Antigius butleri butleri* (Fenton, 1882)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張およそ 35 mm。表面は黒褐色で後翅の下側が白くなる。裏面は薄い褐色の地に目立つ黒斑が多く点在する。オスメスの斑紋の違いはほとんどない。幼虫の食餌植物はミズナラ。卵で越冬。成虫は年1回6月下旬から出現して8月まで見られる。

2. 分布

国外では日本海を囲むロシア南東部、朝鮮半島、中国に、国内では北海道、本州、九州に分布する。県内では大井川源流部とその支流からわずかな記録があるのみである。

3. 生息環境

県内で記録された個体数はきわめて少ないので生息環境を特定することはできないが、県外での生息状況から推測すると食餌植物のミズナラを主体とする落葉広葉樹林が生息地となっていると考えられる。

4. 生息状況

1951年寸又川上流で発見され、大井川源流部からも1960年に発見された。他の地域からは記録がない。寸又川ではその後の記録はなく、大井川源流部でも多くの調査にかかわらずこれまでに10件ほどの記録にとどまっている。

5. 減少の主要因と脅威

成虫の活動が不活発であることから発見されにくく、希少な種となっているが、特に減少傾向は認められない。ただし、ミズナラを主体とする落葉広葉樹林の代表的な種であることから、各種開発による落葉広葉樹林の伐採(11)は大きな脅威となりうる。

6. 保護対策

ミズナラを主体とした落葉広葉樹林の存続が欠かせない。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

小堀 一 (2016) 大井川上流で採集・目撃した蝶5種. 駿河の昆虫, (255): 6990-6991

永井洋三 (1960) 大井川上流のウスイロオナガ. 駿河の昆虫, (32): 860

高橋真弓 (1982) 寸又峡で採集されたシジミチョウ類数種の古い記録. 駿河の昆虫, (118): 3473-3474

高橋真弓 (2000) 大井川上流におけるシジミチョウ類7種の採集記録. 駿河の昆虫, (190): 5348

富山 稔・梅沢賢造・青島 弘 (1962) 大井川上流の蝶類. 駿河の昆虫, (38): 1045-1047

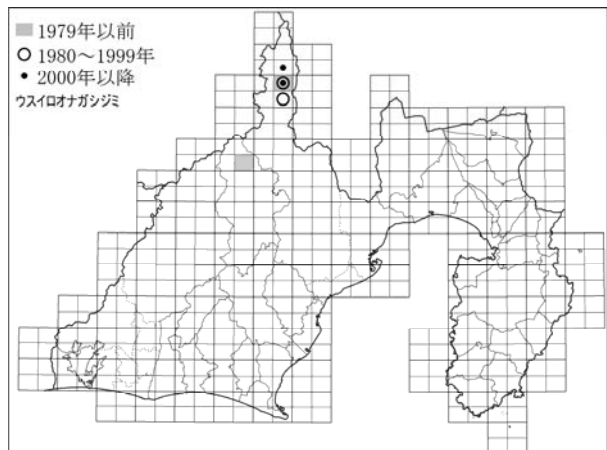
9. 標本

静岡市産 (少数個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



静岡市産♀裏面 2008年7月24日 宇式和輝採集



カラスシジミ *Fixsenia w-album fentoni* (Butler, 1882)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張はおよそ 30~35 mm。翅の表裏ともに黒褐色で、後翅裏面には W 型の白線がある。幼虫の主な食餌植物はハルニレであるが本県では確認されていない。卵で越冬。成虫は年 1 回 7 月中旬に発生し、8 月中旬まで見られる。ヒメジョオンなどの花で吸蜜するほか、湿った道路面において吸水する。

2. 分布

国外では朝鮮半島、サハリン、ロシア、ヨーロッパまで広く、国内では北海道、本州、九州に分布するが、西日本では局地的となる。県内では静岡市大井川源流部、富士宮市西白塚、小山町から記録がある。

3. 生息環境

標高 1,000~1,500 m の落葉広葉樹林に生息し、成虫は林縁や明るい森林内の林道沿いなどで見られる。

4. 生息状況

県内ではこれまで静岡市北部の大井川源流部におけるわずかな記録にとどまり、きわめて稀な種であった。しかし 2008 年に富士宮市西白塚で 1♂、2009 年には小山町内で複数の個体が発見され、最近の大井川源流部の調査でも数個体が採集され、個体数は少ないものの比較的広範囲に分布し、調査次第では各地から発見される可能性がある。

5. 減少の主要因と脅威

稀種に属し、これまでに採集された個体はきわめて少ない。減少している傾向は現在のところ見られない。

6. 保護対策

落葉広葉樹林の存続が欠かせない。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

富山 稔・梅沢賢造・青島 弘 (1962) 大井川上流の蝶類. 駿河の昆虫, (38): 1045-1047

天野市郎 (1987) 赤石岳と大井川上流部の蝶類採集報告. 駿河の昆虫, (138): 4001-4003

土屋忠男 (2008) 富士山にてカラスシジミを記録. やどりが, (218): 38

井上勇治 (2009) 静岡県小山町の蝶の記録. 駿河の昆虫, (227): 6287-6288

小堀 一 (2016) 大井川上流で採集・目撃した蝶 5 種. 駿河の昆虫, (255): 6990-6991

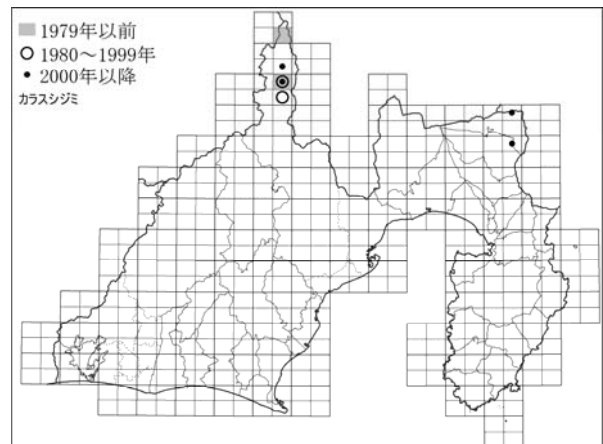
9. 標本

静岡市産 (少数個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



静岡市産♂裏面 2016年7月19日 諏訪哲夫採集



オオミスジ *Neptis alwina* (Bremer & Grey, 1852)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更コード11,13

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張およそ 65~75 mm。表面は黒地に白い筋状の紋が並ぶ。裏面は地色が赤茶色となり斑紋は表面とほぼ同様。オスメスとも斑紋は大差ないが、メスは大きく翅が丸い。幼虫の食餌植物はウメ、スモモなどでほぼ栽培植物に依存している。幼虫で越冬。年1回6月上旬から現れ、8月まで見られる。

2. 分布

国外では中国、モンゴル、ロシア南東部、朝鮮半島に、国内では北海道西南部から滋賀県まで分布する。県内では静岡市を東限として、川根本町及び浜松市などの標高 200~1,400 m の山間部に分布している。

3. 生息環境

中部及び西部の、植栽されたウメやスモモのある山間地の集落及びその周辺に生息している。大井川上流部の樫島や、さらに上流の標高 1,400 m の二軒小屋にも生息している。

4. 生息状況

以前記録のあった標高の低いいくつかの地域から最近記録がなくなるとともに、かつては安定していたやや標高の高い山間部でも個体数が減少したことなどにより、絶滅を危惧するランクは準絶滅危惧 (NT) となっていた。しかし、その後の詳細な調査によりいくつかの新たな産地が見つかるとともに、個体数も安定していることが判明している。

5. 減少の主要因と脅威

比較的寒冷な気候条件を好む本種にとって、標高の低い地域で生息が確認できなくなっていることから温暖化による影響 (71) が考えられる。またほとんど栽培植物に依存していることから栽培植物の管理方法 (71) が本種の生息に直接影響していることも考えられる。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

神奈川県ではすでに絶滅したとされている。

8. 主な文献

斉藤伸行 (2015) 2013~2015年、静岡県西部のオオミスジの記録. 駿河の昆虫, (251): 6898

諏訪哲夫 (2007) 2007年オオミスジの記録. 駿河の昆虫, (220): 6126-6127

高橋真弓 (1967) 静岡県とその周辺におけるミスジチョウ属 *Neptis* の分布. 駿河の昆虫, (60): 1667-1714

高橋真弓 (2008) 2008年静岡市および山梨県南部におけるオオミスジの記録. 駿河の昆虫, (226): 6258-6260

高橋真弓・斉藤伸行 (2016) 2015年静岡県中部および山梨県南部におけるオオミスジの記録. 駿河の昆虫, (256): 7005-7006

9. 標本

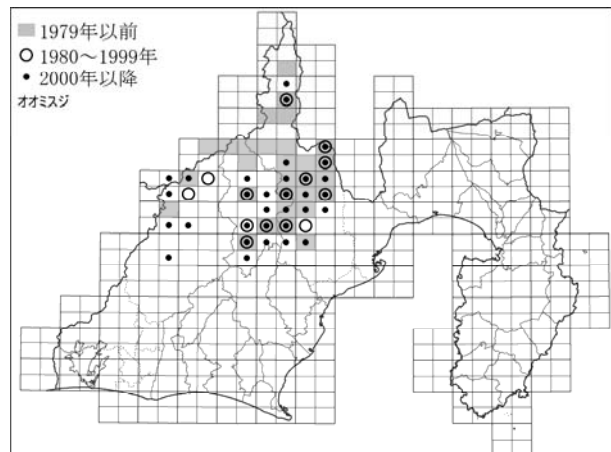
各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



©2019 T.Suwa

静岡市産♀表面 2014年8月6日 諏訪哲夫採集



コムラサキ *Apatura metis substituta* Butler, 1873

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更コード9

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等(富士川以西)):環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

開張およそ 60 mm。翅表は褐色の地色で、中央に橙色帯がある通常の型と、地色がさらに黒く橙色帯部分が白色に置き換わった、“クロコムラサキ”と呼ばれる遺伝型がある。“クロコムラサキ”のほうが遺伝的に劣性と考えられている。どちらもオスの翅表は紫色に光る。幼虫の食餌植物はヤナギ類。幼虫で越冬。平地では年3回発生するが、標高が増すにつれ発生回数を減らし、高い場所では年1回の発生となる。午後になると樹の梢でなわばりを張る。成虫は樹液に集まる。

2. 分布

国外ではヨーロッパから中央アジアを経て中国、朝鮮半島に至るユーラシア大陸北部に、国内では通常の型は全国的に分布している。しかし、“クロコムラサキ”は、東海地方、北陸地方及び南九州以外ほとんど見られない。県内では通常の型は伊豆半島から北遠地方まで分布しているが、“クロコムラサキ”は東部では稀で、伊豆からは記録がない。

3. 生息環境

標高およそ 100 m 未満～1,500 m にかけて、河川の堤防、河川敷などに生育するコゴメヤナギなどのヤナギ林が主な生息地となる。

4. 生息状況

今のところ、県内の各河川にはおおむね見られるが、河川敷のグラウンドや公園の整備など各種の開発により、生息地は減少する一方である。湖西市の産地は河川改修のため消失した。理由は不明であるが大井川源流部ではここ3～4年激減している。

5. 減少の主要因と脅威

河川敷の土地利用の進展や河川改修(13)によりヤナギ林の面積が狭められ、生息地が減少した。“クロコムラサキ”は、比較的採集圧(41)が高い。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

遺伝的な二つの型が同所的に見られることが多いが、黒色型“クロコムラサキ”が出現する比率は地域により異なり、大井川中流や安倍川上流で高く、これらの河川の下流部や天竜川では低い。

8. 主な文献

深澤政晶(2016) 静岡県東部のコムラサキ黒色型. 駿河の昆虫, (253): 6940-6941

福井順治(1977) 佐久間・水窪の蝶類(Ⅲ). 駿河の昆虫, (96): 2824-2829

白井和伸(2002) 天竜川中・下流域のコムラサキについて. 駿河の昆虫, (197): 5499-5509

高橋真弓(1954) 静岡県に於けるクロコムラサキ分布(第2報). 駿河の昆虫, (5): 88-94

宇字和輝(2008) 大井川源流域・二軒小屋地域の蝶[Ⅳ・2006年]. 駿河の昆虫, (224): 6208-6222

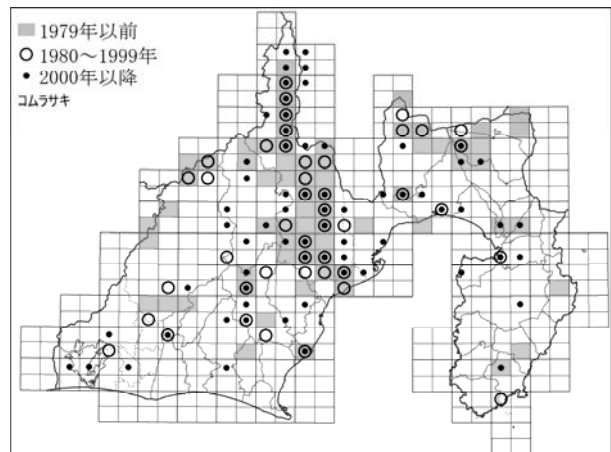
9. 標本

各産地(多数): ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



静岡市産み表面 2015年7月25日 諏訪哲夫採集



クモマベニヒカゲ *Erebia ligea takanonis* Matsumura, 1909

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

開張およそ 45 mm。黒褐色の地色に橙色の帯があり、その中に黒点が縦に並ぶ。後翅裏面の橙色帯の内側に白い帯がはっきりと現れる。幼虫はイネ科、カヤツリグサ科の草本を食べることが各地から記録されているが、県内では調べられていない。1年目の冬を卵で越し、2年目は幼虫で越冬し、3年目に成虫になるとされるが、はっきりとは調べられていない。高山蝶の一種。

2. 分布

国外ではヨーロッパからシベリアを経てサハリン、朝鮮半島北部にわたり広く、国内では北海道大雪山塊と利尻島、本州中部山岳地域に分布する。県内では南アルプスの主稜に産地は多く、浜松市天竜区水窪町中ノ尾根山が日本の南限であり、世界的にも南限となる。

3. 生息環境

森林限界付近の高茎草原の“お花畑”や雪崩草原、樹林帯に生じた小草地が分布の中心となるが、開放的な草原ではなく、ある程度樹林を混じえた疎林を好む。垂直分布の下限はベニヒカゲより高いが、森林限界より高い場所では発生していない。

4. 生息状況

南アルプス主稜線は、良好な自然環境が保たれており、個体数は多い。シカの食害により“お花畑”の植生が損なわれ、蜜源として成虫が集まる場所が縮小している。

5. 減少の主要因と脅威

シカの食害(54)による植生の破壊。登山客増加による踏圧に加え、登山者のストックによる植生破壊(54)も無視できない。

6. 保護対策

産地の一部は国立公園特別保護地区に含まれ、採集は規制されている。各地の“お花畑”ではシカ侵入防止柵を設置して高山植物を保護しており、これが本種の保護にも役立っている。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

北條篤史(2003)南アルプス笹ヶ岳の蝶類分布調査. 駿河の昆虫, (204): 5679-5680

中谷貴壽(2000)南アルプス主稜線のベニヒカゲとクモマベニヒカゲ(1)(2)(3). 蝶研フィールド, 169, 175, 181.

白井和伸(2001~2016)南アルプスの蝶類調査記録(1992~2014年). 駿河の昆虫, 194~256 掲載各号.

白井和伸(2013)南アルプス主稜線のベニヒカゲ属近況. 静岡昆虫同好会 60周年記念誌, pp. 122-127. 静岡昆虫同好会, 静岡.

高橋真弓(1953~2000)大井川水源地方蝶類分布調査報告(1)~(24). 駿河の昆虫, 4~191 掲載各号.

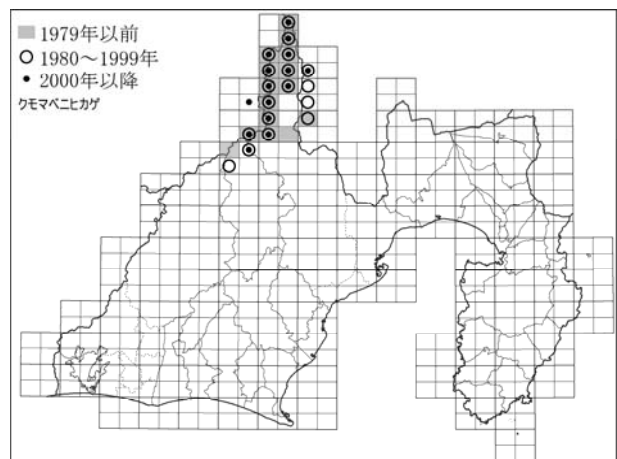
9. 標本

各産地(多数): ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



静岡市産み表面 2008年8月9日 諏訪哲夫採集



静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

開張およそ 40~45 mm。黒褐色の地色に橙色の帯があり、その中に黒点が縦に並ぶ。産地ごとに橙色の帯と黒点の現れ方の変異が大きく、特に後翅橙色帯の発達度合いは変異が著しい。また、前衛の山など低標高の産地では大型となる。幼虫の食餌植物はイネ科、カヤツリグサ科であるが、県内では詳しくは調べられていない。成虫は年1回発生し、主に8月に見られる。高山蝶の一種。

2. 分布

本種を一括 *neriene* として扱えば、国外ではサハラ、ロシア極東、モンゴル、中国東北部、朝鮮半島などに、国内では北海道、本州の東北から中部山岳地域に分布する。中部山岳地域のものはいわゆる“高山蝶”の一種とされる。県内では南アルプス主稜からは多くの記録があり、それから南へ続く白倉山（水窪町）、大無間山（静岡市井川）、山伏（静岡市梅ヶ島）などがそれぞれの支稜の南限となっている。

3. 生息環境

標高 2,000~2,500 m の森林限界付近の“お花畑”に最も多い。沢の源頭などに発達する高茎草原、稜線付近の雪崩草原、樹林帯の縁の小草地など、“お花畑”や、谷筋の草付などの開けた場所に多い。

4. 生息状況

南アルプス主稜線は良好な自然環境が保たれており、個体数は多い。一方、前衛の山々や谷筋などの産地の中には静岡市山伏のようにササが大きくなり消滅した産地や、砂防ダム建設などにより減少している場所がある。シカの食害により“お花畑”の植生が損なわれ、蜜源として成虫が集まる場所が縮小している。

5. 減少の主要因と脅威

ササが大きくなり消滅した産地や、シカの食害による植生の破壊（54）、登山客増加による踏圧に加え、登山者のストックによる植生破壊（51）も無視できない。

6. 保護対策

生息地の一部は国立公園特別保護地区に含まれ、採集は規制されている。各地のお花畑ではシカ侵入防止柵を設置して高山植物を保護しており、これが本種の保護にも役立っている。

7. 特記事項

近年の DNA 研究では本州産が日本固有種となる可能性もある。

8. 主な文献

紅日影（2004）ベニヒカゲ物語—八ヶ岳高山帯のベニヒカゲの生態—。自刊，69 pp.

中谷貴壽（2000）南アルプス主稜線のベニヒカゲとクモマベニヒカゲ(1) (2) (3)。蝶研フィールド，169，175，181。

白井和伸（2001~2016）南アルプスの蝶類調査記録(1992~2014年)。駿河の昆虫，194~256 掲載各号。

白井和伸（2013）南アルプス主稜線のベニヒカゲ属近況。静岡昆虫同好会 60 周年記念誌，pp. 122-127。静岡昆虫同好会，静岡。

高橋真弓（1953~2000）大井川水源地方蝶類分布調査報告(1)~(24)。駿河の昆虫，4~191 掲載各号。

9. 標本

各産地（多数）：ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

（白井和伸・諏訪哲夫）



静岡市産♂表面 2006年8月13日 諏訪哲夫採集

